

ある 外国人の 視点

広々した大地、澄み切った空気…、北海道は自然との触れ合いを体験できる貴重な地として、大きな期待が寄せられてきました。

今から15年前、あるアメリカ人が北海道観光に対して興味深い提言をまとめています。そのアメリカ人とは、アメリカン・センター（1996年に閉鎖）の第16代所長（'80～'83）であったマージョリー・スミス女史です。北海道をこよなく愛するスミス女史が15年前に描いた北海道への提言を、今あらためて読み返していくと、そのなかからこれからの新しい北海道観光のあり方を考えていくヒントがあるように思われます。

景観は観光地の顔

スミス女史は、イエローストーン国立公園をはじめ、観光業を大きな柱とするアメリカ・モンタナ州の出身。彼女は、国際的な視野と女性の視点で北海道観光への意見を述べています。具体的にその内容を紹介していきましょう。

まず、彼女は日本の観光に対して、①高度に組織化され、効率よく大量の人々に対応する、②ほとんどの観光施設が団体向けに設計されている、③観光体験が標準化されているため、誰もが同じものを見て、同じ写真を撮るようになっている、④観光施設が建っている地域は建設前に比べて魅力が減退し、観光施設が景観と調和している例が少ない、といった点を特徴にあげています。

なかでも景観については「外国人観光客が惑わされるのは、観光客向けのホテルや土産物店地域の外見が救いようもなく醜いことである。（中略）ホテルに近づくにつれて、巨大で醜いコンクリート・ブロックの建物が見えるだけである。内部がかくも優美で、外観がかくも醜悪な建物を設計する人々の精神構造はどうなっているのであろうか」と手厳しい意見を述べています。そして「歴史や文化的遺産が観光客を引き付ける中心的役割を担っている所が日本には多くあるが、それに恵まれていない北海道観光にとっては、景色と環境こそが生命であり、またそれだけが唯一の観光の魅力になっている所も多くある」と北海道観光の特徴を分析します。

景色と環境の調和という点で考えれば、美瑛町の風景が思い出されます。ジャガイモ、小麦、ピートなどの畑が織り成す美しい農村景観が「丘のまち」としてある写真家によって全国に紹介され、その後多くの観光客が訪れるようになりました。また歴史

的建造物を生かして、個性ある都市景観を保全している小樽市の例も、建築物と歴史的環境が調和されています。これらは、どちらも地域の個性ある景観の魅力を最大限に生かすため、建築物を規制するなど自ら努力した例でしょう。日本では、個々の建築物を規制する法律はあっても、群として規制する法律はありません。このため、観光地に限らず、個々の建物が目立ってしまい、周囲との調和を欠くことが少なくありません。しかし美瑛町や小樽市では、独自の景観条例などを制定しており、北海道でも景観の重要性が認識されてきた現れでしょう。「日本人は美に対しては鋭い眼をもっているが、醜さは眼に入らない」と、スミス女史は景観への意識の違いを指摘します。群の美を感じさせるドイツの街並みや、開発を最小限にして自然の営みを優先するアメリカの国立公園などと比較すれば、景色と環境の調和という点では、他の国に学ぶべきものがまだまだ多いように感じます。

京都大学大学院・東京工業大学大学院教授である中村良夫氏は著書『風景学入門』のなかで、「物を辺りの地模様にしっくりおさめる」ことで、道や橋、川や港、木立や畑など、その景観がいつまでも鮮やかな印象に残る風景になると指摘します。「道路建設から道の辺のゆかしさへ、住宅建設の個数主義から住宅地のたたずまいへ、河川工事から水辺の風景作品へ」、これが空間構想にふくらみをもたせ、人間の心に響く風景になるといいます。日本のまちにはコンクリートの異質な建築物のみならず、標識、看板、電柱、自動販売機などが至るところに溢れています。これらまちのなかの物の洪水を改善するには、行政の努力が必要です。「(行政は)街灯から舗道の縁石まで、いわば都市施設の下手物にこそ行き届いた目をくばり、地場の魅力ある建築材料を発掘」しなければならないと中村氏は続け、「自治体にとって風景づくりは、これからの町づくりの死命を制する意味を担っている。それというのも、三次産業の隆盛をはかるには、町がその全人格的魅力で人をひきつける必要があります、それには町のイメージが切実な戦略的意義を有する」と指摘します。観光を地

域の重要な産業と捉えれば、風景づくりの重要さが認識できるはずでしょう。

スミス女史は「観光開発を計画するに当たっては、北海道の計画者は新しいアイデア及び北海道が日本の他の地域と異なっている点に焦点を合わせるべき」で「北海道における観光体験を、本州におけるそれとできだるだけ同じようにしようとする努力はしないこと」と提案しています。この言葉にはソフト面はもちろんですが、ハード面から捉えても同じことがいえることでしょう。全国どこにでもあるコンクリートの建物を北海道に建てる必要はなく、地域にある資源を有効に活用することで、スミス女史の言う「相違点を強調し、それを保存すること」になるのではないのでしょうか。日本の一地域だからと、北海道を本州の他地区と同じに考えてはならない。他とは違うということが、観光の面では非常に有利になるのです。

個人旅行の広がり

最近注目が集まる体験型観光。乗馬、カヌー、農業体験などを個人旅行で楽しむ人が見られるようになりました。提言のなかで「日本観光の同一性から傑出するもうひとつの相違点を開発できる」のが北海道であり、それは個人旅行によって達成されると、スミス女史は指摘していました。また「団体旅行に力を入れるのを抑制し、施設をはじめ関連組織を個人旅行の利便性を図る」ことに努め、「北海道の観光体験を個人にとって冒険的なものに」するべきだとしています。それは、①長期的に見て北海道のイメージが作り上げられること、②リピーターが期待できること、そして、③雇用の増加、収益と投資の機会が分散されることによる地域活性化を期待できるためであるとしています。③については、家族経営的な民宿が中心であった離島・礼文の観光と、当時大規模パック観光旅行が増えていた斜里町宇登呂地区を例に出し、「収益はどちらの場合、地元民を潤すことになるであろうか」と、彼女は問います。

今までの北海道観光は団体旅行が中心だったと言

わざるを得ないでしょう。しかし、ここ数年、個人旅行ニーズが高まっているのも事実。ファームイン、アウトドア体験、創作活動など、個人旅行を積極的に受け入れる施設も増えてきました。「個人旅行への対応は、業界としてもここ2、3年で注目が集まったばかり。これからまだまだ勉強が必要」と言う関係者もいます。個人旅行を楽しんでもらうためには、交通アクセス、施設、情報提供など、見直さなければならぬ側面は多くあります。そして、受け入れ地域の意識を高めることも重要な要素の一つではないかと思われま

北海道観光の改善点

スミス女史は北海道観光の将来のために、航空運賃と時間帯について、改善を強く主張しています。「羽田～千歳間の運賃は不当に高」く、成田～千歳間のスケジュールが不便なため、海外から観光客を受け入れる国内での競争力を低下させているのです。エア・ドゥの就航で、羽田～千歳間運賃は安くなりましたが、低価格運賃を北海道観光にもっと生かせる方法はないのでしょうか。また、これを解消するには、千歳空港の機能拡充が求められるでしょう。

もう一つスミス女史が主張する興味深い改善点は、観光スケジュールを1時間繰り上げるとい

です。春分の日と、秋分の日の日の出と日没は長崎と釧路では1時間弱の差があり、夏至では82分、冬至では75分も違います。夏の間、北海道の日照時間は、本州、九州、グアム、サイパン、香港、タイよりも長いのです。食事開始時間、観光施設の開始時間等を1時間繰り上げ、個人が有効に時間を活用できる選択肢を増やすことが、個人旅行ニーズに応えるという考えです。この提案はまさにサマータイム制度を意味しています。最近サマータイム制導入に向けて議論が活発化していますが、制度に頼らなくても、個々の施設で対応できる具体的な提案ともいえるでしょう。

外国人観光客のターゲット

日本への外国人観光客の多くは、京都や奈良といった日本の歴史や伝統に魅力を感じます。しかし、北海道にはそうした魅力が乏しいといえます。スミス女史は、北海道として優位性を持ってアピールできる外国人観光客は、日本在住の外国人と日本近隣諸国諸島在住者であると考えていました。遠隔地に在住する外国人には、近いところに費用をかけずに楽しむことのできる山やスキー場、北海道に匹敵する観光地があります。お金を使って、遠くまでやって来て見たいと思うのは、伝統的でエキゾチックな日本であり、北海道に魅力を感じないというわけです。北海道の爽快感にひたる、涼しい気候やウィンタースポーツを楽しむ、これを魅力と感

じるのは、国内に在住する外国人と近隣の熱帯諸島在住の外国人で、北海道がアピールする外国人ターゲットはそこだとい

います。

100年後の北海道に向けて提言を行った『総研調査20号～北海道の魅力を高める』（長銀総合研究所'93年12月発行）のなかには、北海道は「アジアの北のリゾート」としての役割があることが提言されています。北海道は道内だけでなく、アジアの人々にとって、冬のスキーリゾート、そして夏の避暑地として滞在型観光に力を入れるべきで、極東ロシアの観光拠点への期待についても述べられています。ここ数年急激な増加で注目を浴びている台湾観光客の増加は、そのスタートといえるのかもしれませんが。これは、チャーター便運航によるアクセス面での利便性が増したことが要因の一つ。アクセスと北海道の魅力

北海道観光の進むべき方向

をアピールする情報発信がかみ合えば、東アジア圏で観光地としての北海道が確立できるのかもしれない。

スミス女史は、市町村レベルの雪祭りを連携させ、スキーや郷土料理を楽しむ旅、滑降とクロスカントリーを組み合わせた

付けるスキーツーリングコースなど、具体的な提案まで踏みこんでいます。また、利尻・礼文を旅した経験から、この地区の観光開発についてもコメントしています。利尻・礼文の魅力は、北海道観光の典型である“自然美、冒険、組織化されていても目立ちすぎない観光基盤施設”だといいます。当時、北海道で最も新しいトップクラスの観光地は知床であり、「丘の上に建つ醜いホテル、客間に流れ込むラウドスピーカーの音、道内どこで食べても同じような食事」と、利尻・礼文と対照的な様相をなしていたようにスミス女史は感じていました。知床は、標準的北海道コースのなかに、新しく必見の地として仲間入りをしたことで、その魅力を半減させてしまったのではないかと考えていたのです。観光客が増加するなか、斜里町では、昨年初めて知床国立公園カムイワッカ地区の自動車通行規制を行いました。これには賛否両論がありましたが、スミス女史は、この対応をきっと評価してくれることでしょう。

スミス女史の提案は多少概略的で、今となっては、それほど新しい考えではないのかもしれませんが、しかし「外国人の私が、どんな風に考えているかを伝えることができれば」という言葉に、北海道をこよなく愛する気持ちが伝わってきます。

北海道の観光資源

アメリカ・モンタナ州のイエローストーン国立公園は世界初の国立公園で、その後、世界各国に国立公園が設立されるきっかけとなりました。

アメリカでも、日本と同じように開発か自然かといった対立がありました。なかでもヨセミテ国立公園のヘッチヘッチー溪谷のダム建設計画は、国内を二分する大論争に発展しました。結果的には'13年にダム建設が決定し、開発派が勝利したことになるのですが、この論争が自然保護とは何かを考える大きなきっかけとなりました。これを機に、レクリエーション資源として自然の価値を国民が認識するようになり、利用する国民への自然保護教育、環境教育が重視されるようになったのです。アメリカの国

立公園で働くレンジャーには、自然のなかでの遊びや学習を一般の人に教えるインタプリターと呼ばれる解説員がいます。また、子供向け環境プログラムをもつ市民団体もあります。環境問題が世界的に大きな課題となっている今、自然や環境に対する正しい知識や技術を身に付けることは非常に重要です。体験を通してそれらを学ぶ場として、北海道は最適地であるといえます。

立教大学社会学部教授・溝尾良隆氏の著書『観光を読む 地域振興への提言』によれば、観光とは“国の光を観る”ことであるとされています。その光とは地域の個性や特性のことで、具体的には山や川、海、湖などの自然資源と、神社や寺、庭園などの人文資源があり、地域の個性や特性をあらゆる産業や文化活動、ゆかりの人物などの資源も、広義の観光資源のなかに組み込まれているといえます。北海道の個性は自然資源です。「観光と保存とは両立しないとか、食べるためには開発をとというのが、観光資源をより魅力あるように見せることが、将来においても観光事業を健全に展開する」（同書）との指摘のなかに、スミス女史が伝えたかった思いが隠れているような気がします。

'96年、北海道開発局がまとめた地域活性化のためのツーリズム調査報告書には、北海道の異質性に注目した新しいツーリズムスタイル『グランド・ツーリズム』が提案されています。北海道を一つのエコロジー空間と捉え、その空間で地域振興につながる長期的・持続的なツーリズムスタイルを見出していくことが、今後の北海道の発展に大きな意義があると述べられています。

スミス女史が思い描いた北海道観光は、15年の時を経て、今、やっと動き出しているのかもしれませんが、「世界はもうディズニーランドを必要としないことを私は確信している。（中略）生活とその可能性の洞察を広げてくれる場所、そういう場所を人々は必要としている、北海道をそういう場所の一つにできるのだ」——スミス女史の提言は、こんなふうに締めくくられています。